国立国語研究所学術情報リポジトリ

リレーエッセー「喜界島の方言を残そう」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002437

リレーエッセー「喜界島の方言を残そう」

『広報きかい』に 2010 年 11 月より連載

新連載

喜界島方言調査団リレーエッセー
喜界島の方言を残そう①

木部　暢子氏（国立国語研究所）

今年の9月9日から15日まで、方言の記録と調査のために喜界島におじゃましました。メンバーは、国立国語研究所、東京大学、京都大学、琉球大学、千葉大学、金沢大学、日本女子大学、ニュージーランド・オークランド大学などから集まった35名です。日程の関係で九地区しか伺うことができませんでしたが、みなさんには、本当に親切にしていただきました。ありがとうございます。また、お世話くださった教育委員会の方々にも感謝申し上げます。

喜界島方言は、大変、難しい方言でしたが、いろいろな発見もあって、楽しい一週間でした。何より、「パ・ピ・プ」の発音を聞いたときには、感動しました。「パ・ピ・プ」の発音というのは、たとえば、「花」を「パナ」と言ったり、「昼」を「ピル」、「節」を「プシ」と言ったりすることで、喜界島の北部で盛んです。一方、喜界島の南部では、これらを「ファナ（花）」、「フィル（昼）」、「フシ（節）」のように発音します。

喜界島のみなさんにとっては、このような発音は当たり前かもしれませんが、「パナ（花）」、「ピル（昼）」、「プシ（節）」のような発音は、じつは、奈良時代から平安時代にかけての奈良や京都のことば（大和言葉）の発音なのです。奈良や京都ではその後、「パナ（花）」が「ファナ」に、「ピル（昼）」が「フィル」に、「プシ（節）」が「フシ」に変化し、さらに、江戸時代初期（17世紀）の頃、「ファナ(花)」が「ハナ」に、「フィル（昼）」が「ヒル」に変化していきます。

このようなことを、私たちは大学の授業で習うのですが、授業ではもちろん、昔の発音を聞くことはできません。ところが、喜界島方言では、これらの発音を実際に聞くことができるのです。まるで、話に聞いて、その姿を想像していたおばあちゃんに出会えたような、そんな感じでした。

また、喜界島方言は地区ごとの方言の差が大きいのですが、高い山や大きな川があるわけでもないのに、なぜ、方言差が大きいのか、これも不思議です。その理由については、これから解明していかなければなりません。

喜界島方言は、たくさんの魅力とたくさんの不思議を持っています。このような喜界島方言をぜひ、子どもたちに語り継いで、残していっていただきたい、そういう思いで帰りの飛行機に乗りました。

喜界島とは、これからも長いおつきあいになると思います。今後とも、どうぞよろしくお願いします。

荒木での調査の様子

無料法律相談室開催のご案内

法律問題やトラブルを抱えてはいるものの、こんな相談恥ずかしくてできないとか、法律相談するべきかどうかでお悩みの方へ、弁護士による適切なアドバイスが受けれる無料法律相談が左記のとおり開催されます。この機会に是非ご利用くださいますようご案内します。

●**主催者**　よつば法律事務所（大阪）
●**開催日**　平成22年11月29日（月）
●**内　容**　（講演会）9時～10時
　　（法律相談）10時～13時
●**場　所**　役場コミュニティーホール

【問い合わせ】
住民課戸籍係　☎65-1111（内線31）

～お知らせ～

ご存知ですか？
スギラでのグラウンドゴルフには申し込みが必要です！

最近、空港臨海公園多目的広場（スギラビーチ横の広場）で、申請をしないでグラウンドゴルフなどの行事をされている方々がいます。

少人数での利用は申請の必要はありませんが、グラウンドゴルフなどの大人数で広い面積を占用する場合には、下記まで申し込みが必要です。

空港臨海公園は、みんなの財産です。ルールを守り、きれいに気持ちよく利用しましょう。

【申込先】
喜界ガーデンゴルフ　☎65-1855

喜界高校創立記念講演会・喜高塾開催

榊原英雄氏（普通科昭和30年卒）が『卒業後の人生設計について』で講演

県立喜界高等学校（藤﨑健一郎校長、生徒数２２５人）は11月５日、創立記念講演会と第３回喜高塾を同校体育館などで行った。

講演会の講師は、昭和30年に同校を卒業した池治出身で川崎市在住の榊原英雄氏。同氏は、『卒業後の人生設計について』の演題で、全校生徒に熱く語りかけた。

榊原氏は初めに、生徒会長として原水爆禁止運動をし、署名・募金活動に取り組んだ高校時代を自己紹介代わりに披露し、「学校で教わることの一部しか人生では役に立たない。卒業して30才までが頭脳をみがく一番の時期。職場や大学でいかに自分の価値を付けていくか、他人と同じようにするのではなく、社会にある数え切れない学ぶ機会から、自分にあったものを修得し、資質を高める努力をして欲しい」などと話し、働くうえでの心構えとして、「あいさつが人間関係の基本。上司や先輩との間には厳しさがあるが、自分から接していくようにすれば、必ず円滑になる。また、きちんと背広を着ていても、必ず足元は見られる。汚れた靴では台無しになるので、社会人としてつま先までの身だしなみが大切である」と話した。

後輩らを教え励ました榊原氏

さらに、現在の社会情勢について触れながら、「老齢社会を迎える過程でみなさんの力が必要になる。高校で基礎を学んでおけば、都会には受け入れてくれる器が各方面にある。楽をして高収入を得る時代が過ぎて厳しい時代になっても、努力することによって他人にない付加価値を身につけよう」と話し、「学校がつらい時も、『今日は誰とこんな話をしよう。先生にこんな質問をしよう』と積極的に行動すれば、その日は楽しくなる。人生においても失敗を恐れず、何才までに何をしたいかの計画を立て、自ら設計図を書こう」と語りかけた。

最後に榊原氏は、江戸後期に歴史家、思想家、漢詩人などとして活躍した頼山陽の漢詩『述懐』を紹介して講演を終えた。

＊　＊　＊

講演会後は喜高塾があり、５人の先輩がそれぞれのテーマで後輩達に語りかけた。

喜久秀人氏（３年生講師）
『人生は面白い』
英良治氏（普通科２年講師）
『「変わったなぁ　善くなったなぁ」を実感して』
栄和子氏（商業科２年講師）
『私の選んだ道』
恵藤和教（普通科１年講師）
『故郷のよさをバネに21世紀に羽ばたけ』
澄田直敏（商業科１年講師）
『喜界島ってどんなところ?』

喜界島方言調査団リレーエッセー

喜界島の方言を残そう②

新永　悠人氏（東京大学大学院）

わたしは普段、お隣の奄美大島の宇検村（湯湾集落）の方言を調査しております。村の小学校にいらした先生が喜界島出身の方ということもあり、喜界島にはいつか訪れたいと思っていたところ、今回喜界島方言調査団に参加する機会をいただき、思いがけず喜界島に来ることができました。山がちで、森深い雰囲気のある大島に比べ、喜界島はなだらかで、日差しの明るい感じがするのが印象的でした。

今回の喜界島の調査では、わたしの所属する「文法班」では小野津、志戸桶、上嘉鉄、荒木、中里の5か所をまわらせていただきました。いずれの地域でも、みなさん非常に丁寧に、熱心に教えてくださり、時にはこちらの書き取るスピードが間に合わないこともあるほどでした。

西海岸に立てば、遠くにその姿が見られるほどの距離にある喜界島と奄美大島ですが、様々な点で似ているところもあれば、違うところもあり、大変興味深いものでした。調査最終日の成果発表講演会では、「猫」を意味する喜界島方言「マヤー」と「グルー」に関して、突拍子もない新説（珍説）を披露させていただきましたが、講演後すぐに、来場者の方に「忌言葉（いみことば）」との関連を指摘され、わたくしの説の間違いを正していただきました。まだまだ学ばなければいけないことがあることを身にしみて実感いたしました。

滞在中は多くの方々に大変お世話になりました。本当に有難うございました。

小野津での調査の様子

シマの話題

各年代のキズナをリレー！ 中里集落恒例　49 祝賀会 !!

数え 49 歳の年祝いを迎える男女を、前年に迎えた男女が主催して祝福する恒例の「中里集落 49 祝賀会」が２月６日、多くの 40 代以上の参加者を集め、同集落新公民館において盛大に“挙行”された。

この行事は、昭和４年生が数えを迎えた年に第１回が行われ、今年で 34 回目となる。今年めでたく年祝いを迎えたのは昭和 38 年生。男女８人が招待された。

祝賀会は、37 年生の野間明敏さんの名（迷）司会により進行。野間昭夫区長のあいさつや 37 年生から 38 年生一人ひとりに花束の贈呈があった。

恵保彦さんによる乾杯の後、余興の部に入ると野間明敏さんの司会も“舌”好調。野間靖子さんの祝舞に始まり、「心を込めて唄います」と界眞子さんの島唄、韓流女性グループ「少女時代」のヒット曲『ジー』に乗せた野間弘也さんと 37 年生の女性陣がコラボした即席ユニット「ヒロ♡ヤ with 熟女時代」のダンス、遠藤浩文さんによるセーラー服や宇宙戦艦ヤマトの制服など衣装を次々と替えながら数種類の楽器を演奏するパフォーマンスなど、多くの出し物で会場を沸かせた。

最後は、38 年生を代表して正木喜久也さんが「このような楽しい祝賀会を催してくださり有り難うございました。次は私たちが 39 年生のために頑張りますので、また来年も元気にこの場にお集まりください」と感謝の言葉と来年の協力依頼を述べ、得田喜代治副区長による万歳三唱で大団円を迎えた。

会場を大爆笑の渦に叩き込んだ
熟女時代 feat. Hiro ☆ YA

教職員らがバドミントンで汗 たがいの交流を深める

町教育委員会職員と学校教職員らは、たがいの交流と親睦を深めようと２月５日、町体育館でバドミントン大会をした。

大会は全試合ダブルスで行われ、44 歳以下の A パート、45 歳以上の B パート、女性限定の C パートの３パートに、補欠を含めて 125 人が参加。各パートで息詰まるラリーの応酬や珍プレーが連発する中、参加者らは和気あいあいと普段のストレスを羽根にぶつけていた。

C パートに出場した橋口慶さん（湾小教諭）は「久しぶりの運動で思うように動けなかったが、心地よい汗を流せた」と予選敗退にも満足そうな笑顔をみせた。

試合結果は次のとおり

A パート
- 優　勝　富田・寔（教委）
- 準優勝　村岡・古川（一中）
- ３　位　中原・山﨑（湾小）
- 〃　安・松田（教委）

B パート
- 優　勝　松永・高良（上小）
- 準優勝　藤原・久保（坂小）
- ３　位　濵・前田（一中）
- 〃　登山・堀（小小）

C パート
- 優　勝　桜井・西岡（教委）
- 準優勝　福山・向井（早小）
- ３　位　辻・藤﨑・板倉（早小）
- 〃　石澤・肥後（喜高）

喜界島方言調査団リレーエッセー
喜界島の方言を残そう③

トマ・ペラール（日本学術振興会・京都大学）

喜界島方言には新しいものもあれば、古いものもたくさんあります。例えば「腰」が「クシ」となり、オがウに変わっているように、独特の変化が見られます。方言は訛っているとよく言われますが、標準語の方が「訛って」おり、方言の方が古いものを残している例も多いのです。例えば「花」を喜界島では「パナ」や「ファナ」と言いますが、その発音は古代語の名残りです。標準語の「ハナ」という発音の方が新しいものです。また、万葉集などに見られる「トジ」（妻）は喜界島で未だに使われているのに対し、本土では約千年前に消えた言葉です。

言葉は常に変化していくのが自然の流れであり、誰もそれを防ぐことができません。訛りや言葉の乱れを批難する人は自分の言葉がどれだけの変化を経ているのかを考えたことがないでしょう。どの言語や方言も変化しますが、変化する部分や変化の方向は異なります。時間を経てもあまり変わらない部分もありますが、それも方言によって異なります。

日本語の歴史を遡るには、各方言に残された古いものを集める必要があり、それらを合わせた時に初めて元々の姿が見えてきます。どんな方言も重要で、その方言のかけらがなければ日本語史のパズルが完成しません。喜界島の方言も例外ではなく、筆者が専門とする歴史言語学にとってとても重要であり、残さなければならないということを、昨年九月の調査で改めて確信しました。

志戸桶での方言調査の様子

シマの話題 その2

早春の喜界路で老若男女366人が汗―俊寛ジョギング―

早春の喜界路を駆け抜けたランナーたち

平安末期、『源平盛衰記』や『平家物語』によれば、政権中枢を占める平家の打倒を画策した「鹿ケ谷（ししがたに）の陰謀」に関わったとして鬼界ヶ島に流され、生涯を終えた俊寛僧都。その遺徳をしのぶ俊寛ジョギング大会が3月6日、町体育館を発着地点に老若男女366人が参加してあった。

早春の陽気に恵まれる中、参加者は2キロ、5キロ、10キロの3コースに分かれて健脚を競った。2キロコースの親子連れは手をつなぎながら、5・10キロコースの成人や中高生らは好タイムを目標に懸命に走り、沿道からはさかんに声援が送られた。

2キロの部、女子1位の小田麻里奈さん（小野津小5年・当時）は「登り坂がきつかったけど去年は入賞できなかったので1位はうれしい」と話した。

今大会には、九電工陸上競技部の朝日嗣也選手も参加し、子どもらの手本となる美しいフォームを披露した。

大会結果は次のとおり、

2キロの部（279人）

男子 ①龍田優斗（6分55秒）、②中園竜矢、③住岡真至

女子 ①小田麻里奈、②吉永真唯、③西岡愛梨

5キロの部（53人）

男子 ①萩原望夢（19分19秒）、②濵川光太郎、③槇大貴

女子 ①廣美奈代（24分19秒）、②廣知子、③川波志乃

10キロの部（34人）

男子 ①吉田圭志（44分25秒）、②岩崎尽、③岡本大成

女子 ①生島小梅（54分56秒）、②岡本夢実、③西野亜紀

喜界島方言調査団リレーエッセー
喜界島の方言を残そう…④

狩俣繁久・當山奈那（琉球大学）

喜界島方言調査団と島の人たちの交流会の席で川畑さおりさんの力強く伸びやかな歌声を堪能し、島唄の世界に触れた。その川畑さおりさんがメジャーデビューした。元ちとせも中孝介もローカルを究め、全国的に活躍する先輩である。川畑さおりさんの活躍も期待したい。

自分の生まれ育った土地の文化や言葉について熱く語り誇れる何かをもっている人は、都会、外国に行って自信を持って自分を語れる強い人である。

喜界島にはたくさんの宝がある。島唄も島の文化も島の言葉も島の宝だ。どこにいっても自信を持って自分を語る若い人を育てることが今は必要なのである。島の言葉や島の文化を教えるのは、狭い人間を育てるのではない。自分は喜界島の生まれだと自信を持って語れる子供たちを育てる第一歩が島の文化と言葉の教育なのである。

昔は、標準語か方言かの二者択一を迫り、標準語しか話せない教育を強いた。しかし、人間にはたくさんの言葉を使いこなす能力がある。二つの言葉を話せることをバイリンガルといい、たくさんの言葉を話せることをマルチリンガルという。グローバル化が進み、日本でも日本語標準語と英語のバイリンガル教育の取り組みが官民でなされている。2ヶ国語以上の言語習得を目指したマルチリンガル教育を行なうところある。国際舞台で複数の言語を操って活躍している人は自分の故郷の文化や母国語を大切にする。

故郷を深く愛するには、まず故郷のことについて知らなければならない。一朝一夕に言葉を全部まるごと覚えることはできない。日常生活の簡単なあいさつや島唄から始めるのもいい。島の言葉で語ることわざを教えてもいい。ことわざには祖先から引き継がれてきた知恵や親子の情愛が詰まっている。島の自然を表現する単語、草木や花、虫や鳥を方言でなんというのかを教えるのでもいい。子どもたちは、大人の活動や言葉に注意をむけて耳を傾けるようになるだろう。島の自然や生き物を注意深く観察するきっかけになるだろう。深く知れば知るほど故郷を大切に思い、誇りをもって語るようになるだろう。

鹿児島大学離島地域看護学実習学生訪問のお願い

看護職を目指す鹿児島大学の学生約90名が5月11日から4日間、「喜界町の暮らし」を勉強をするため来島します。

医療、福祉、保健だけでなく、町民のこれまでの人生経験や集落への思いなど、色々とお話しを聞かせていただきます。皆さんのお話しを通じて「集落で語り継いでいきたいこと」や最終的には喜界町をまるごと勉強したいと考えています。

学生たちは喜界島に行くのを楽しみにしています。学生が訪問したときはぜひ皆さんの思い、言葉のシャワーを学生たちに浴びせてください。よろしくお願いします。

鹿児島大学医学部　教授　波多野　浩道